

特集 3

社会園芸： 人を知り，社会を知り， そして植物を極める

宮田正信先生は、問題の原因を個別要素に分解して研究するという研究方法の実践性に疑問を感じ、様々な分野・知識を総合して問題解決の道を探るという方向で研究を展開してきた。また、人や社会をもっと知りたい、様々な園芸技術を広め、楽しみたいという強い欲求の結果としてたどり着いたのが社会園芸であった。社会園芸が目指すもの、その難しさ、将来の夢について語っていただいた。

果樹園芸から社会園芸へ

「私はもともと果樹園芸が専門です。特に特定の果樹に限定することなく、様々な果樹の栽培技術を実践的な立場から研究してきました。果樹の分野では、いかに効率的に生産を行うかということが中心課題でした。しかし、こうした研究によって効率的な生産方法を開発して普及しても必ずしも農家の生活も生活者の暮らしも良くなっていきませんでした。本当に自分の研究はこれで良いのだろうかという疑問を常に持つようになりました。

そうした中で生産者だけでなく一般の人々がもっと豊かになれる社会の創造に貢献できる農学を模索するようになりました。また、園芸が持っている多面的な機能を追求しました。このような試行錯誤の結果として行き着いたのが社会園芸です。すなわち、1人1人の人間が植物と関わりながらもっと豊かに暮らせるような社会・コミュニティを作っていきたいと考えるようになったのです。」

果樹や野菜の生産を目的とする生産園芸と異なり、社会園芸とは一体どのような学問なのか、その目指しているところはどこにあるのか伺った。



東京農業大学農学部
宮田 正信 講師

植物を育てることの喜びを感じられる 園芸技術の開発を目指す

「農家は決して経済的な動機だけで農産物の生産をしているわけではありません。園芸とは、種を播いて、育てて、最終的には農産物を収穫して、また種を取って、次の再生産につなげる活動です。そうした一連の活動の中で作物を育てる喜び、収穫する喜びを体験します。そうした喜びを多くの人に共有してもらい、豊かな社会の形成に貢献しようとするところに社会園芸のねらいがあります。

社会園芸の目的は福祉学や心理学などと相通じるものがありますが、基本的に異なるのは作物を育てる園芸学

で社会に貢献するという事です。ここでは、経済的生産目的とは異なる様々な目的をもった人々が作物や花を育てるという行為に適合できる園芸技術を解明することが重要な課題となります。」

社会園芸は身近な存在、しかしその効果を評価するのは難しい

「園芸は大きな機械や広い農地がなくても、誰でも無理なく楽しめるところに大きな特徴があります。また、心身にハンディキャップをもった人々でも適切な支援があれば十分に楽しむことができます。そのため、こうした人々の特徴に合わせた生活者の質(QOL)向上のためのプログラムや園芸療法プログラムを開発することも重要な研究課題となります。このプログラム作りでは、いかに『育む』喜びを体験できるかが大きな課題となります。」

しかし、こうして開発したプログラムの優劣や効果を評価する方法はまだ確立されていません。現在、参加者に対するアンケートやヒアリングで評価していますが、十分とはいえません。私達は福祉的な視点や生活の質の観点から社会園芸を評価していきたいと考えています。」

社会園芸では学生の教育はどのように行うのですか。ここでも通常の園芸学の教育とは異なる教育が必要になると思いますが。



作物と土に親しむ人々の顔はやさしい



東京農業大学の屋上緑化の試み

人を知り、社会を知り、そして植物を極めるのが教育の基本

「私たちが行っている学生教育では、『人を知る』『社会を知る』ことを基本にしています。ですから病院や福祉施設、公園、緑地、街路、学校などでの実習やボランティア活動が大切になります。こうした実習を通じてどのようなスキルを教室や実験室そして実験圃場で学ばなければいけないかがわかります。大学でスキルを身につけ、フィールドでその有用性を検証する、そしてまた大学で新たなスキルを身につける、このフィードバック学習が基本となります。」

ですから、東京農業大学に新設されるバイオセラピー学科では、学生が学べる有意義なフィールドをどれだけ多く先生が開拓できるかが教育の成果を大きく左右すると思います。そのためには厚木キャンパスが立地している地域との関係をより緊密にしていきたいですね。

また、社会園芸では花を作れる、野菜や果物を作れる、果樹の剪定ができる、庭を造れる、フラワーアレンジメントやクラフト作りができるといった生活全般に関わる総合的な力をもった学生の育成が課題となります。そのためにも教員間の連携が不可欠になります。」

(聞き手：門間敏幸)